

平成18年度 試験研究評価(外部評価)結果

番号	事業名	テーマ名	評価段階	担当部	開始	終了	所内総合評価	外部総合評価平均	外部総合評価	委員	コメント(原文)
1	木質バイオマス消融雪システム実用化研究事業	木質バイオマス消融雪システムの開発	事後	電機	H15	H17	3	3.5	4	A委員	商品開発としてはできたものの、結局市場で使えるかは不明である。域内のエネルギー源を使うことでのモデルはよいが、耐久性を含めて一冬だけの実証では疑問である。県関連の施設等でのデモも有効であろう。60℃の湯は道路だけでなく施設の暖房を兼ねたシステムとしての提案ができるのではないかな。
									4	B委員	目標が明確でありニーズもあると思われるが、ペレットコスト、インシャルコストが実用化に見合うのかなど、費用対効果を検証する必要がある。
									3	C委員	地球温暖化防止のためには有効だが、木質ペレット燃料が唯一最善なものか検討を要すると思う。住田町以外の地域では、更に経済性が悪いと思う。
									3	D委員	木質バイオマスを消雪対策に活用する意図は良いと思う。今後の商品化、耐久性、農業分野での利用などの課題に積極性に対応してほしい。
									4.5	E委員	降雪時と積雪時の効果についてさらに試験が必要ではないか？開発されたペレット燃料技術を一般家庭用だけでなく農業分野へも用途を広げて欲しい。
									2.5	G委員	木質資源の利用に関しては、エネルギー源の供給から、燃焼機のメンテナンス、廃棄物の処理といった周辺を明らかにしたモデルを構築していただきたい。行政ニーズに従っての開発と考えられ、その波及効果に関しては、今後3年程度は観察していただきたい。木質バイオマスは、岩手の専売特許ではないようなので、他地区開発品との比較も欲しい。
									3	H委員	費用と効果、その他の条件を思うとまだまだ超えなければならぬハードルがあるのかなの感じを受けました。
									4	I委員	ニーズ等々については前年コメントした。完成年に関わる実証試験も順調に推移しているように思える。
2	戦略的技術開発推進事業	ZnO単結晶基板の応用に関する研究(1)	事後	電機	H15	H17	4.5	4.1	4	A委員	県のプロジェクト研究としてうまく立ち上がったと判断する。展開も絞ったテーマがほとんど100%と十分であろう。目的の一つである、基板を供給するシステムは東京電波の担当なのか、記述は不明である。
									4	B委員	H15～H17の3年間で、設備の導入から各テーマの製品の試作まで当初計画どおり進んだことは評価できる。しかしながら、ZnOの本質的な各特性があまり調べられていないようで、今後ZnOの特徴を生かした製品を作製するためにも測定および調査を継続する必要がある。
									4.5	C委員	順調に特許出願5件という成果を出している。
									4	D委員	ZnO単結晶基板の応用は、岩手に産業クラスターを創生することを期待させる。また、新規性の高い技術の開発をスピーディに行なった点は評価できる。
									3.5	E委員	研究者の責任の所在について、鮮明にして頂きたかった。
									3	G委員	県としても破格の費用をかけての研究となっているが、今後県内にどういうクラスターが生まれるかを明確にしていきたい。先導的な研究であるのは判るが、それを生かすための県内企業の企業力アップのための課題を確認し、所内連携の種としていただきたい。
									5	H委員	私の知識では判断しにくい部分が多すぎますが、岩手県発で世界初があることは夢のある話と思いました。
									5	I委員	基盤的部分から応用まで、極めて順調に進行された。
3	酸化亜鉛産業クラスター形成事業	ZnO単結晶基板の応用に関する研究(2)	中間	電機	H18	H20	4.5	4.0	3	A委員	概ね順調に進展していると判断。コンソ、JSTと各種助成を得たプロジェクトとなっているが、成果を明確に区分する必要がある。特に工業技術センターと委託先の成果の区別がつくようにプレゼンすべきです。
									4	B委員	各テーマとも実用化に向けた研究開発の段階にあり、市場化に取り組む新商品も現れつつあるが、一方で新たな課題が発生することは当然予測される。そのためにセンター職員の対応機会が増加することは避けられない。現状の研究体制では追いつくことは難しく、研究員の増員が必要である。
									4	C委員	研究補助員を増強し、十分な研究環境を維持して成功を期したい。
									4.5	D委員	ZnO単結晶基板の実用化は世界初ということであり、大いに期待できる。説明のあった新しい光検出器の実用化を是非達成してもらいたい。
									3.5	E委員	多額の試験研究費投入による経済効果が、数字で表れるスケジュールについてももう少し具体的に伺いたかった。
									3	G委員	世界初の実生産を目指していただきたい。
									5	H委員	—
									5	I委員	汎用性も見据え取り組んでおられる。
4	支援研究活動活性化事業	塗装剥離用ドライアイスプラスト装置の開発	中間	電機	H18	H19	3	3.3	3	A委員	社会的ニーズは高い。ただし、新規性が高い分、基礎データ(定量的)の蓄積が必要である。優位性がデータの提示できれば、共同研究先も見つかるのでは？
									3	B委員	塗装剥離の市場は広範に及ぶものと思われる。従ってそれぞれの用途に応じたドライアイス、ノズルの種類やグラインダとの複合的な装置の開発は考えられないか。
									3	C委員	人員・時間的に研究体制が不十分と感じた。本当に素材としてドライアイスが最適なのか、スタートラインに立って再検討することも必要ではないか。
									3.5	D委員	技術開発の仕方や、目標の設定についてはさらに検討が必要と思われるが、着眼点はすばらしい。
									4	E委員	想定企業に合わせた研究の為、道路分野での技術活用になっているが、他の分野にも用途を求めれば、市場は12億円を越えた規模になるのではないかな。
									3.5	G委員	テスト機の必要性を感じる。当初の最終目的は「建物」に関連する部分であるので剥離作業の姿勢・剥離粉の「ぬれ」対策・回収方法も問われる事も予想される。また、塗料の付着性についてのデータ収集も不可欠。自動車部品を含め工業製品の多くで、外観品質を決める塗装分野の研究体制を、民間も巻き込み強化すべきと考える。
									3	H委員	今一実用の観点が見えてきません。
									3	I委員	原理的には、容易であり汎用性が課題。

平成18年度 試験研究評価(外部評価)結果

番号	事業名	テーマ名	評価段階	担当部	開始	終了	所内総合評価	外部総合評価平均	外部総合評価	委員	コメント(原文)
5	産業廃棄物再資源化技術開発事業	県境不法投棄物溶融スラグの骨材利用	中間	環境	H17	H18	3.5	3.9	3.5	A委員	課題は順調にクリアしてきていると判断。骨材としての品質の均一性の証明が必要であろうが、ものが違うときの保証は可能であろうか？
									3.5	B委員	溶融方法としてはシャフト炉方式が最も適していると思われる。スラグの骨材利用には電気炉などを使用してスラグ調整を行うことで解決できないか。
									3.5	C委員	県境不法投棄廃棄物から発した研究だが、今後、コンクリート建造物の解体・廃棄が増えると思うので、研究を進めて企業化に成功して欲しい。
									3.5	D委員	県境不法投棄物の有効利用は喫緊の課題であり、この課題に正面から応えようとしていることは評価できる。また、着実に技術が完成の方向に向かっていていると思える。
									4.5	E委員	県の施策に関する研究である。よって骨材利用については県土整備部、環境生活部、そして商工労働観光部の連携した取組みが感じられなく残念に思った。
									3.5	G委員	安全性のデータを継続的に収集して欲しい。「問題なし」の表現が揺らぐことがなければ、今後の効果は期待できるものと思います。
									5	H委員	現状回復するのに何百億のお金と数十年の歳月が必要と報道されていましたが、研究を聞いて感激しております。先日新聞報道されていましたが、センターでお聞きしたことから見れば不服でした。いずれ素晴らしいことだと思います。
4	I委員	外部から観ると、岩手県における不法投棄は大いに問題視されている。研究・行政一体化してPRすべき。行政と強く連携すべき課題。									
7	高品質鑄鉄製造技術開発事業	鑄鉄からの脱マンガン・脱クロム技術の開発	事後	材料	H15	H17	3	3.5	4	A委員	基本的特性は抑えたと判断。実用技術としてはスケールアップの課題が残っているので、頑張ってもらいたい。
									4	B委員	開発目標が達成されたことは評価できる。今後は作業性の容易化による環境改善とコスト低減について検討を加え業界に積極的に普及されることが望まれる。
									3	C委員	岩手県内の鑄物産業に大いに貢献する研究。成功して欲しい。
									3.5	D委員	必要性、緊急性も高く、新規性もある。また、研究の進捗も順調であるとみられる。
									3.5	E委員	岩手県内での経済効果も知りたかった。
	JSTサテライト岩手実用化のための可能性試験(FS)	除滓しやすい鑄鉄用酸化脱マンガン剤の開発	中間	H18	H18	3	3	3	G委員	材料の有効利用技術としては、企業の原材料調達・品位の確認といったところも含めてほしい。(地域における材料サイクルモデルといったものをイメージしていただきたい。)	
								3	H委員	最終需要は分かりませんが、実用化出来れば経済性に長けた良い着想かと思えます。	
4	I委員	目的(意義)等極めて大きいと考える。									
8	都市エリア産学官連携促進事業	プラズマ粉末肉盛溶接とプラズマ溶射を用いたCo合金による表面改質技術の開発	中間	材料	H16	H18	3	3.4	3	A委員	報告は目標2のみであり、タイトルの変更が必要。耐食試験以外に電気化学的な方法もあったほうがよいのではないかと。Co合金の製造コストと機能性とのバランスが必要。他の類似耐食処理との比較があれば理解しやすい。
									3.5	B委員	医療用材料として使用可能であれば市場は大きい。また、産業用での耐食・耐磨耗材料として他の類似製品に比べ性能、コストが優れていれば需要が期待できる。
									3	C委員	生体親和性向上は、重要なテーマ。頑張ってもらいたい
									3.5	D委員	岩手発の技術として成果が期待される。新事業の創出へつなげるような製品化、企業化への見通しも検討されることが望ましい。
									4	E委員	参加企業以外の同業の企業への波及も考えて欲しい。
									3	G委員	大学研究の実験手伝いということで研究内容には、特にコメント無し。(いただいた費用内で仕事を終わるかどうかの見積もりなどは示して欲しい)
									3	H委員	成功した時の実用性を考えると素晴らしい研究かと思えます。
4	I委員	少ないeffortで大きい成果を挙げられている。大学との係わりを新しい方向で考えるべき。									

平成18年度 試験研究評価(外部評価)結果

番号	事業名	テーマ名	評価段階	担当部	開始	終了	所内総合評価	外部総合評価平均	外部総合評価	委員	コメント(原文)
9	いわて新ブランド食品創生事業	バイオテクノロジーによる食品機能性解明と加工技術開発	事後	食品	H15	H17	5	4.8	4.5	A委員	私的であるが、機能性食品の品質を誰がいかに保証するのか。大々的に糖尿病合併症に聞くとと言えるのか?その辺の戦略をきっちり持つ必要がある。開発食品も多彩で、やってきたことは着実と評価。
									5	B委員	234種からの有望素材の選択と、発酵技術の開発により機能性食品の製品化ができたことは画期的である。用途拡大については企業への技術移転を進めることが望ましい。機能性食品については更に研究を重ね特産品としたい。
									5	C委員	県内の農林水産物を素材とする食品工業は重要で、比較的即効性が期待できると思う。サプリメントも有望。
									4.5	D委員	県の農林水産物の有効利用を目指す県の研究機関らしい研究で、しかもすぐれた成果を上げている。この基礎研究を産業化に結びつける研究が望まれる。
									4.5	E委員	県産食品素材の機能性を数値で証明し、早急に岩手県民に情報発信して欲しい。LOHASな県民の生活スタイルに合っている。
									4.5	G委員	健康にどれだけ良いかというデータが欲しい。健康食品の場合、実際の例がほしい。時間がかかるのが、ある集落や事業所内での継続摂取での成果を参考例として示すことは出来ないか検討いただきたい。長いこと使われ続けた実績あってこそその機能性食品と思う。
									5	H委員	雑穀は岩手の特産、それを活用して製品化する事は県民が望む所かと思われ。食品の世界は天然、自然、本物志向、雑穀ほど自然栽培に適った物はないのではないかと思います。
									5	I委員	大別して2つの研究について発表されている。目的、手法、結果、応用とも良く考えられ進められている。学術誌への投稿も考えるべき。
10	ブランド・ニッポン創成事業	東北地域の硬質小麦を用いた高品質パン製品の開発	事後	食品	H14	H17	3.5	3.6	4.5	A委員	地域産の小麦の消費拡大という目的では調理法の開発ができたので十分である。
									3.5	B委員	特になし。
									3.5	C委員	稲作転換作物としての小麦だが、輸入小麦に劣らない食味を持つ一層の品種改良が望まれる。利用面の研究は成功。
									3.5	D委員	国産、特に東北での小麦生産の増加を背景とした意義のある研究である。パンの食味もすぐれていると思われる。
									4	E委員	食の地産地消を岩手で推進する為のモデルとして最適なテーマ。啓蒙普及のため好結果を期待する。
									3	G委員	東北農業研究センターの委託による試験研究として特にコメント無し。(一般消費者としては、県産小麦の自給率をなぜ上げる必要があるのか、上げないとうなるのかをシンプルに教えて欲しいという思いはあるが。)
									3	H委員	外麦では無く国産麦の消費振興の為に理由とか。外麦の方が作り易さ、食味とも勝るとの事。消費者の立場からみると無理があると思います。
									4	I委員	内麦、パンとのキーワードで試験から商品化まで順調に進んでいる。より一層広い移転方法を考えられるべき。
11	JSTシーズ発掘試験	新世代「地あぶら」の開発	中間	食品	H18	H18	3.5	3.7	3	A委員	プロジェクト研究としての目的やアウトプットが明確ではない。エゴマを増産したいと言うことなのであろうが、規模が小さい。現状では評価ができない。
									3.5	B委員	特になし。
									3.5	C委員	2年前に友人が、木製品にエゴマ油で“オイルフィニッシュ塗装”を試みた(手袋をしないで)。ほどなく両手に湿疹が出てきて、たちまち全身に拡大して、ひどい目にあつたという。エゴマ油にアレルギー成分があつたか、酸化した油だったのか定かではないが、友人は別段アレルギー体質ではなかった。
									4	D委員	エゴマによる地あぶら製造技術の開発は、必要性、緊急性があり、かつ地元の加工業者も既存設備で対応可能なものを目指すという点で「新規性」がある。地域資源のもつポテンシャルの引き出しという観点から高く評価できる。
									4.5	E委員	生活習慣病の予防は近年、大きな問題となっている。製品を活用した生のデータが欲しい。
									3	G委員	特になし。
									4	H委員	地場産業振興、地産地消、健康志向の着想から進めたいと思います。
									4	I委員	ω3と同時に、他成分も念頭におきながら、より一層進められたい。
12	産学官連携研究開発プロジェクト事業	地域機能性素材を利用した新規フレーバー食品の開発	事前	醸造	H19	H20	4	3.6	3	A委員	目的とする「かりん酒」は機能性食品(養命的)なのか、ちょうやの「梅酒」のようなものを狙うのか不明である。ただ作って物珍しさだけでは長続きしないのではないかとその意味で、ビジネスプランがもっと必要であろう。
									4	B委員	特になし。
									4	C委員	会議でも提言があつたように、ネーミング・効能等での表現に注意。
									4	D委員	かりんの栽培普及など、産地化の可能性の検討に課題を残すが、着眼点は良く、今後に期待できる。
									3	E委員	市場規模と総予算額とを比較した場合、県の特産品でないカリンを原材料とした研究は地域にとって有用であったかは疑問。
									3	G委員	カリン=岩手 と認知される図式を作る研究でしょうか。ヤマブドウと同じレール上にある開発であれば、以前のスタンスや、成功事例・失敗事例を表に出した上でスタートして欲しい。
									5	H委員	産学官の典型かと思えます。沈滞気味のこの業界に刺激とサジェスションを与える事にもなりますので大いに進めることを希望します。
									3	I委員	広く健康機能との関連で研究を進めることには意義がある。機能性食品としては、特保を目指す“勢いで”進められたい。